

# 白峰村における出作り分布の変遷について—桑島地区を例として

岩 田 憲 二 石川県白山自然保護センター

## ON THE CHANGES OF THE DISTRIBUTION OF DEZUKURI IN THE KUWAJIMA DISTRICT, SHIRAMINE-MURA

Kenji IWATA, *Hakusan Nature Conservation Center, Ishikawa*

### はじめに

手取川ダム建設に伴う水没移転問題により、白峰村桑島（ここでは下田原も含む）の居住者は昭和49年から52年にかけて、白峰村内の桑島代替地・鶴来町桑島町・それ以外の地域（金沢、野々市など）の三つに分散した。そして、当時すでに終末的段階を迎えていた出作りは、この移転によって更に衰退した。

現在、下田原に2戸、赤谷に6戸の夏期居住者がいるが、昔からの伝統的な出作りに近い生活形態を続けているのは80歳前後の高齢者（下田原1戸・赤谷2戸）のみである。他は、一世代下の50～60歳代の人達が通いや短期居住の形で、持ち山の手入れなどのために住んでいる。ここでは、下田原・赤谷・桑島周辺（大嵐谷・小嵐谷・百合谷・向山）の3地域に区分して桑島の出作りを考える。なお、出作りに関する表の中でダム移転者の◎印は、移転時（昭和52年）まで旧桑島に居住していたことを示す。◎印のない人で転出先が金沢となっていれば、それ以前すでに金沢へ出ていたことを意味する。

### 下田原の出作り

下田原は江戸時代には牛首十八カ村の一つで、明治以後は旧牛首村（現在の字白峰）や旧嶋村（現在の字桑島）と共に白峰村として発足した。これからもわかるとおり、下田原は桑島とは別の集落であったので本来なら分けて記述すべきであるが、下田原のほとんどの出作りは桑島から来ていたので、桑島の出作りとして紹介する。下田原で確認できた出作りは51戸で、明治から現在までの居住者をとり上げた。このうち今も出作りに来ているのは僅か1戸（セイシ山）のみで、他に1戸が仕事のために短期居住している。いずれも夏期みの居住である。

下田原の出作りで特徴があるのは、いわゆ

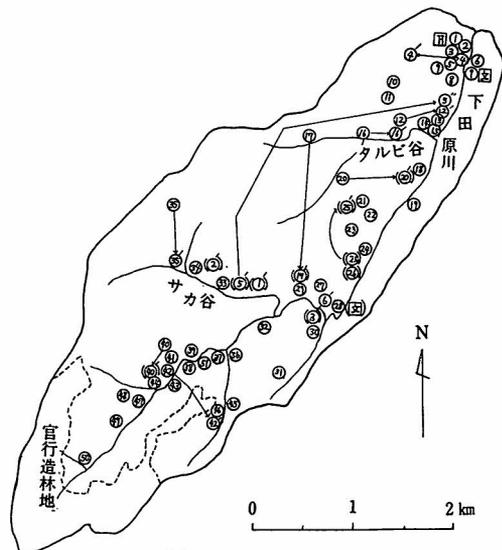


図1 下田原の出作り分布  
( ) は先住者が転出後の移住者

表1 下田原の居住者

(×:死に絶えた) (○:居住した)

屋号	転居者	居住形態	土地所有	転出先	後の居住者	標高	昭和30年	備考
1 ナカヤ	◎	永住	自作	鶴来		500	○	初め(33)→35(5')のあとに夏期出住。
2 トウキチ	◎	永住	自作	鶴来		500	○	セイゴロ(34)のあとに夏期出住。
3 タロベ	◎	永住	自作	金沢		500	○	ゴ:タロ(30)のあとに夏期出住。
4 ヨサブロ	◎	永住	請作	鶴来		500	○	(4')に夏期出住。
5 キンゴロ		永住	自作	京都		500	○	初めのあと(5')から(5')と夏期出住。
6 ヒョウイ	◎	永住	自作	金沢		500	○	(6')に夏期出住。
7 ゴロヨモ		永住	自作	金沢				(40)-(40')に夏期出住。
8 ナカジャケ		?	?	?				
9 ジン		季節出住	請作	勝山			○	冬期は(4)にいた。
10 アゼチチュウマ	◎	季節出住	請作	金沢				
11 サンノスケサンマ		季節出住	請作	金沢				
12 ヤロク(ウエコヤハ)	◎	季節出住	請→自	(12')→桑島			○	12'に出住地を変えた。
13 セイロクコヤバ		季節出住	請作	愛知県				
14 ヨヨモ	◎	季節出住	請→自	鶴来				
15 マツジロ	◎	季節出住	請→自	金沢				
18 アゼチ(コヤハ)		季節出住	自作	(18')→金沢		670	○	(16')の前にはサブロベ(赤谷の51)がいた。
17 セイマツ(コヤハ)	◎	季節出住	請作	29→金沢			○	初めのあと(20)に移った。
18 チョウザイモ	◎	季節出住	請作	金沢	ヤサキチ			出たあとヤサキチ(20)が入った。
19 ヤサ		季節出住	自作	大阪			○	-時期、ここで知作をしていた。
20 ヤサキチ	◎	季節出住	請→自	(20')→鶴来		500		チョウザイモのあと(20')に移った。
21 ボンサマ	◎	季節出住	自作	勝山	キンサ	750		出たあとキンサ(25)が入った。
22 サンロク	◎	季節出住	請作	桑島		750	○	
23 ヨウヒチ	◎	季節出住	請作	桑島		750	○	
24 マタキチ		季節出住	請作	尾口村	ワリ→キチ			出たあとキンサ、次いでキチが入った。
25 キンサ	◎	季節出住	自作	(21)→桑島	キチ		○	ボンサマ(21)へ出たあとにキチが入った。
26 キチ	◎	季節出住	請作	桑島			○	キンサのあとへ入った。
27 セイスケ		季節出住	?	?				
28 サヘエ		季節出住	請作	福井県	(分敷地)			出たあとは夏期分敷地になった。
29 キチマツ		季節出住	自作	名古屋	セイマツ			出たあとセイマツが入った。
30 ゴンタロ		季節出住	請作	?	タロベ			出たあとタロベ(3')が夏期出住。
31 ハチロエモ		季節出住	自作	×				大正頃に下田原(45)から移った。
32 セイシ	◎	季節出住	自作	金沢		710	○	今も夏期には出住りに来ている。
33 キクハチ		季節出住	請作	×	ワダ→ワダ			出たあとワダ(5)とワダ(1)が夏期出住。
34 セイゴロ		季節出住	請作	明谷→勝山	トウキチ	870	○	あとにトウキチ(2)が夏期出住。
35 イザイモ(ワロヤ)		季節出住	自作	35'→尾口村		1020		(35')に移った。
36 サンクロ		季節出住	請作	勝山				
37 シロヨモ		季節出住	請作	×				
38 イワヨモ		季節出住	自作	×		800		
39 セイシロ		季節出住	請作	小松			○	
40 ゴロヨモ		季節出住	自作	金沢			○	(40')に移った。冬期は(7)。
41 セイザブロ		季節出住	請作	名古屋				
42 コザイチ		季節出住	自作	福井県		820(42')		(42')に出住地が変わった。
43 ヨシマツ		季節出住	請作	名古屋			○	
44 ゼンキ		季節出住	自作	×	ゴロヨモ	840		あとにゴロヨモ(40)が入った。
45 カンザイモセイキチ	◎	季節出住	自作	鶴来			○	カンザイモセイスケのこと。
46 サブロ		季節出住	自作	名古屋		820	○	

岩田：白峰村における出作り分布の変遷について—桑島地区を例として

屋号	転移転者	居住形態	土地所有	転出先	後の居住者	標高	昭和30年	備考
47	◎	季節出作	自作	鶴来			○	
48	◎	季節出作	請→自	金沢			○	
49	◎	季節出作	自作	鶴来				
50		季節出作	請作	京都				
51	◎	季節出作	請作	金沢				

る永住出作り（永住者）が元々の下田原居住者を除くと1戸もないことで、実質的には季節出作りが全てとってよい。調査対象居住者51戸のうち、永住出作りが7戸に季節出作りが43戸あり（不明1戸）、後者のほとんどは桑島を母村として夏期のみ下田原に来ていた（不明1戸）。また、7戸の永住者は全て下田原在住者であるが、夏期には上流部の自分の山に出作りに行っていたので、実質的には季節出作りと考えてよい。

それではなぜ下田原には季節出作りが多かったのだろうか。橘（1984）はこの点について、下田原共有地の請作年期が20年と短い事実に関連ずけて説明している。焼畑には毎年火入れをして新しい耕地を造ると同時に、休閑地を造って植生を回復し、将来の火入れに備える。この際〔1回の火入れ面積×休閑年数〕分の山地面積が最低必要とされ、これだけの焼畑可能地がなければ安定した経営ができないとしている。一般に、休閑による植生回復年限を30年程度とすると、下田原共有地の20年という請作期間は短すぎて、植生は回復完了していない。必然的に、20年の請作終了時には同一地内の山地はまだ火入れができないので、他の請作地を借らざるをえない。つまり、20年年期という請作期間の短さは、そのまま請作面積の狭小さを意味し、同一場所での安定した出作りを行なうには障害となっている。これにより、出作りの定着性が浅くなり、季節出作りが多くなったとしている。

次に下田原地内における居住地の転居についてであるが、確認できた事例は下記のとおりの9例あった。

* 下田原の転居例	備考
a : (5') → (5'')	出作り地が変わった。
b : (12) → (12')	〃
c : (16) → (16')	〃
d : (17) → (17')	他人の跡地に入った。
e : (20) → (20')	〃
f : (25) → (25')	〃
g : (35) → (35')	出作り地が変わった。
h : (40) → (40')	他人の跡地に入った。
i : (42) → (42')	出作り地が変わった。

以上の転居例を分類すると、出作り地が変わった場合と、他人の出作り跡地に入居した場合がある。大道谷の例でもわかるとおり、こうした住居移動は、その時々の実利的発想に基づいておこった場合もあり、それほど珍しいことではない。ただ、他地域と比較すると下田原の場合は全般的に作物の栽培条件に恵まれていたといわれており、そうした生産性の良し悪しはそれほど転居の要因にはならなかったと推察される。

ちなみに、下田原地内での土地の良し悪しについては、(i)左岸の方が右岸よりも良い(ii)ナカジャケ谷よりも奥が良く、特にヤロク(12)からヒョーイ(6')の間〔キンサ(25)・サンロク(22)・ヨウヒチ(23)・ヨヨモ(14)・マツジロ(15)・ヤサキチ(20')など〕が作物の栽培条件が良かったとされている。

下田原の居住者の転出先については、福井県（勝山）へ出た人が多かった大道谷とは異なり石川県

内が多かった。これは、ダムで水没した桑島からの出作り者が多かったためにこうした結果となった。また、関西・中京方面への転出者が案外と見られたのは、戦前の頃まで行なわれた冬期の出稼ぎ先と関連があるのであろう。大道谷で半数近く見られた福井県（勝山）への転出は、下田原では4戸あるのみで少ない。これは、下田原・桑島と勝山方面との人的交流が薄かったことを示している。実際、下田原から直接勝山へ出るルートはなく、旧・新丸村か赤谷を経由しないと行けなかった。

こうした勝山方面との係わりの薄さは、下田原・桑島に季節出作りが多かったことと無縁とは言い切れない。先に、大道谷の項で永住出作りと勝山の関係について示唆したが、それは、桑島と縁の深い下田原に永住出作りが存在しないことによっても逆説的にも裏付けられている。つまり、本来下田原における出作り形態というものは夏期のみ居住する季節出作りが普通であり、大道谷のように夏冬居住する永住形態は受け入れられなかった。その要因の一つとして、前述の共有地の請作期間の短かきがあるのではなかろうか。仮に、ナギ畑とセットになった出作りの農場経営システムが白峰村の南部から北部（字白峰から字桑島・下田原）へ伝わったとするなら、その時点で出作りの形態も永住から季節居住に変わったと考えられる。ナギ畑を伴う出作りの農場経営システムを考えると、水田耕作や畑作が主体であった手取川下流部から出作り文化が伝播したとは考えにくい。

### 赤谷の出作り

赤谷は手取川の一流で、ダム水没前の旧桑島からは距離的にも近く、その後背地として多数の出作りが分布した。赤谷流域は三つの地域に区分できる。手取川との合流点から小赤谷分岐点までを下赤谷（地図では1～16）、分岐点より上流は小赤谷（17～29）と大赤谷（30～64）に分かれる。

以上の三地域で合計64戸の出作りが確認できたが、当初予想していた赤谷は桑島地内にあるために、下田原と同じく季節出作りがほとんどではないかという考え方は全く覆えされた。赤谷上流には16戸の永住者または永住経験者がいて、必ずしも季節出作りのみというわけではなかった。

その原因として考えられるのは、赤谷上流が作物の栽培条件に特に恵まれていたことである。赤谷流域でナギ畑・常畑の作物がよくできたのは、(i)小赤谷左岸のキチ(23)より上流〔ゼンタロ(24)・ヘイシロ(27)・サクザイモ(29)] (ii)大赤谷左岸のジュウベエ(50)より上流〔サブロベ(51)・イチジロ(57)・シロベ(58)・セイロク(59), オンメ(60)] (iii)大赤谷右岸の最上流部〔ゴザイモ(55) トウハチ(56) ヘイロク(61)] である。これは主として地質条件によるものであり、前述の上流地域は黒くて、湿り気のある土壌が厚く堆積するジョウデン（上田）である。また、右岸よりも左岸の方が良いのは日照時間の関係である。(i)～(iii)の作物栽培良好地域には、赤谷の永

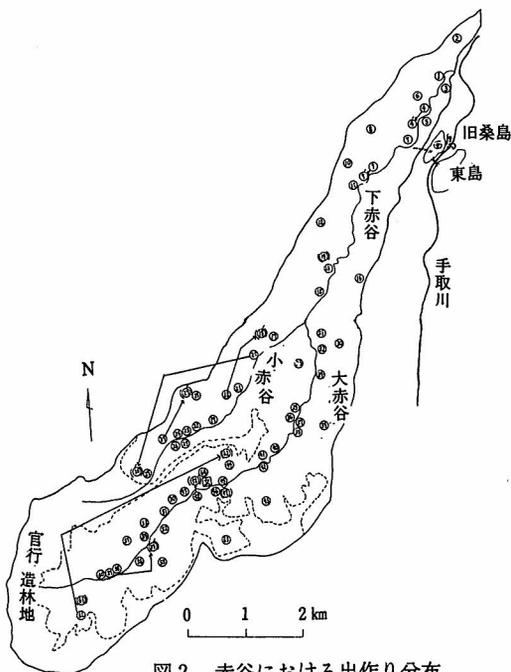


図2 赤谷における出作り分布  
( ) は先住者が転出後の居住者

岩田：白峰村における出作り分布の変遷について—桑島地区を例として

表2 赤谷の居住者

(×：家が絶えた) (○：居住した)

屋号	居住形態	土地所有	転出先	後の居住者	標高	S30年頃	備考
1	ハチロ	季節山作	請作	鶴来		○	コメも作っていた。
2	オトマツ	季節山作	自作	×			前はヤロク(下田原12)がいた。
3	チュウジロ	季・(通い)	自作	桑島			前はサンザ(尾口村釜谷へ出た)がいた。
4	ヤスヨモ	季節山作	自作	金沢			昭和9年の水害で少し上流(4')へ。
5	スエ	季節山作	自作	鶴来			
6	ゴンニョモ	季節山作	請作	新丸村			昭和10年代にはいなかった。後にわかが入った。
7	マツチヨモ	季・(通い)	自作	桑島			今も時々来る。
8	セイジャイモ	季節山作	請作	金沢			
9	チュウゾ	季・(通い)	請(?)	勝山			昭和9年の水害で少し上流(9')へ。
10	ロクヨモ	季・(通い)	請作	金沢			
11	ニサ	季・(通い)	請作	?			昭和10年代にはいなかった。
12	ヨジロ	季・(通い)	請作	×			昭和10年代にはいなかった。
13	キュウザ	?	請作	北海道			大正時代にはいなかった。
14	ヘイキチ	季節山作	請→自	鶴来		○	現在も夏期には一時居住。
15	シンジロ	季・通い	自作	金沢			昭和10年代にはいなかった。
16	ヤヘエ	季節山作	請作	金沢			昭和10年代にはいなかった。
17	ヨシロ	季節山作	請作	×	18(シロ)		約50年前までいた。
18	シロ	季節山作	請作	野々市		○	ヨシロのあとに入った。
19	コサ	季節山作	請→自	鶴来		○	現在も夏期に一時居住。前はゼンタロ(24)がいた。
20	セイゾ	季節山作	請作	29→鶴来			冬は愛知県にいた。
21	シロ	季節山作	請作	18→野々市			ヨシロ(17)の後へ移った。
22	ウヨモ	季節山作	請→自	鶴来	700	○	
23	キチ	永→季節	自作	勝山	700	○	今も夏期に出作りに来ている。
24	ゼンタロ	季節山作	請作	桑島			昭和9年の水害で出た。今も来る。
25	マツサブロ	季節山作	請作	鶴来			冬は愛知県にいた。
26	サンニョモ	季節山作	請作	桑島		○	
27	ヘイシロ	季節山作	請作	28→勝山			
28	カンザイモ	季節山作	自作	鶴来	27(ハロ)		
29	サク	季節山作	請・自	小松	20(ヒ)		大正時代までいた。
30	ジロキチ	季節山作	自作	鶴来	705	○	
31	コジロ	季節山作	自作	金沢		○	(30)の分家。
32	キチ	季節山作	自作	桑島			(30)の分家。下田原(28)へ移った。
33	ヤサブロ	季節山作	請→自	野々市		○	
34	トメザエモ	永住	請作	×(?)	サンジ		大正時代に出た。サンジは夏期に炭を焼いたのみ。
35	ジンヒチ	季節山作	請→自	金沢		○	(37)の分家。
38	チュウサイ	永住	請→自	金沢		○	
37	ジロウザエモ	季節山作	請→自	鶴来	610	○	冬は京都にいた。
38	マツベ	季節山作	請→自	金沢			
39	チュウダ	季節山作	自作	勝山			戦争中に出た。
40	アラヤ	季節山作	自作	白峰			
41	ハチザイモ	季節山作	請作	×			母村は白峰。
42	トクヨモ	季→永	自作	勝山			昭和初期に出た。ヒエ田を作っていた。
43	セイゴ	季節山作	請作	鶴来			四十数年前に出た。
44	イチロウザイモ	季節山作	請作	?	サヘエ	720	あとにサヘエ(62)が入った。
45	セイハチ	永住	請作	×			大正期にはいなかった。
46	シンザ	季節山作	請作	勝山	ヘイシロウ	670	

赤谷(下赤谷：1～16, 小赤谷：17～29, 大赤谷：30～63)

	屋号	居住形態	自働所有	転出先	後の居住者	標高	S39年頃	備考
47	ヘイシロ	永住	自作	48→桑島		870	○	(48)が出たあとへ入った
48	イッシュモ	永住	請作	鶴来			○	1999(84)の後に移った。数年前まで夏期にきた。
49	セイジロ	季節出作	請作	野々市		730	○	今も夏期に来ている。前はウエがいた。
50	ジュウベ	永住	請作	ワカ(51)の養子		780	○	去年まで大阪から夏期のみやってきた。
51	サブロベ	永住	自作	大阪				下田原のアゼチ(18')の前にいた。
52	マタヨモ	永住	請作	×				
53	セイマ	季節出作	請作	能登				大正期に出た。
54	ジヘエ	季節出作	自作	桑島	セイロク			
55	ゴザイモ	永住	請作	金沢				
56	トウハチ	永住	請作	福井県				
57	イチジロ	永住	請作	勝山				
58	シロベ	永住	請作	×				戦後、家が壊れた。
59	セイロク	永→季	請→自	54→桑島			○	(54)のあとに移った。
60	オンメ	季節出作	請作	小松			○	
61	ヘイロク	永住	請作	×				(82)のあとに入った。
62	サヘエ	季節出作	請作	鶴来	ヘイロク			(44)のあとへ入った。昭和10年代に村へ出た。
63	シロヨモ	季節出作	請作	金沢		820	○	
64	キューベエ	季節出作	自作	勝山	イッシュモ	700		出たあとイシヨモン(48)が入った。

住出作り16戸中9戸が位置しており、こうした諸条件の良さが安定した出作り経営を可能とし、その結果永住者がでてきたと考えられる。

もう一つの原因としては、字白峰(旧牛首村)との関係の深さが考えられる。下田原と違って、赤谷からは尾根を越えると大道谷にも勝山にも出られるので、その影響をいくらかは受けたと推察される。実際、赤谷上流には字白峰出身者が約20戸居住したといわれ、今回の調査で確認できたのは9戸あった。そのうち永住出作りは5戸あり、字白峰(大道谷)出身者と永住形態との相関関係は全く無しとはいえない。つまり、大道谷で一般に見られた永住出作りが隣接する赤谷へ伝わった可能性もあるということである。桑島の後背地としての地理的条件を考えると、赤谷は本来季節出作りの場所といえるが、現実には永住者も居住した。この意味では、赤谷上流部は永住出作りと季節出作りの両者の出作り経営システムの融合地といえる。

以上の二つの要因——栽培条件の良さと字白峰との関係の深さ——によって赤谷上流部に永住出作りが分布したと考えられる。

赤谷居住者の転出先をみると、全体としては石川県内への転出者が多い。県内では、白峰村12戸(桑島代替地10戸・字白峰2戸)、鶴来町桑島町11戸、その他16戸(金沢・野々市で14戸)の合計39戸あった。県外へは福井県8戸(その内、勝山7戸)あり、やはり勝山への転出が多かった。なお、赤谷内部での転居例は夏期のとおり8例確認できた。

* 赤谷の転居例	備考
a : (4) → (4')	昭和9年の水害のため転居。
b : (9) → (9')	〃
c : (21) → (18)	他人の跡地に入った。
d : (20) → (20')	〃
e : (27) → (27')	〃
f : (48) → (48')	〃
g : (59) → (59')	〃

h：(62) → (62') 他人の跡地に入った。

以上の例を見ると、aとbを除いて全て他人の跡地に入っており、全般的により条件の良い場所に移っている。例えば(20)は小赤谷の上流に移り、一見不利な場所に思えるが、じっさいには(20)の方が土地が良く、作物も良くできた。

最後に赤谷全体で見れば、前述の土壤が良かった上流〔(i)～(iii)〕では、ナギ畑・常畑での農業生産に力点を置き、集落まで距離があったのでワサビ・杉苗といった軽くて値段の良い商品が作られた。これに対して土壤条件があまり良くなかった下赤谷では、集落に近いこともあって、重くて量のある炭の生産が中心であった。

### 桑島周辺地域（小嵐谷・大嵐谷・百合谷・向山）の出作り

この地域は、桑島を母村とする出作り地の内、下田原と赤谷以外をまとめたもので、確認できたのは41戸（小嵐谷6戸・大嵐谷17戸・百合谷14戸・向山4戸）あった。いずれの出作り地も割合早い時期に出作りをやめたので、古い時代の分布はあまりはっきりせず、41戸以外にも名前だけ確認できた出作り者が9戸あった。

この地で出作りが早く終わったのは土地自体の狭さが考えられる。小嵐谷・大嵐谷は土壤良く栽培条件には恵まれていたが、土地が狭くて斜面が急なために、大部分の出作りが戦前までに村（桑島等）に帰った。また、百合谷は土壤があまり良くなく、早い時期に出作りが減少した。

この地域で特徴があるのは、桑島からの出作りがほとんどを占めた小嵐谷・大嵐谷・向山では全て季節出作りであったのに対し、字白峰と境を接する百合谷には同所からの出作りがあり、しかも永住出作りも分布したことである。これは、赤谷上流に字白峰出身者と永住出作りが分布していた事（両者は必ずしも重複しない）と実によく似ており、永住出作りの形態が字白峰方面から影響を受けたことを裏付けている。百合谷の字白峰出身者は8戸〔(24), (25), (26), (27), (28), (29), (31), (34)〕あり、その内5戸〔(26), (27), (29), (31), (34)〕が永住出作りであった。

この地域の出作り者の転出先は全体としては石川県内が多く、その中でも白峰村内へ出た人が14戸と最多であった。小嵐谷・大嵐谷・向山からの転出者はいずれも石川県内に居住しているのに対して、百合谷の出作り者の中には福井県や関西方面への転出者が若干いて、こうした点にも百合谷の特徴が表われている。つまり、それほど県内に居住することにとらわれない点で、大道谷の出作りと似たところがある。

全体としては、この桑島周辺地域出作り地には白峰村の出作りの特徴が集約されているといえる。永住出作りの傾向が強い字白峰の特徴は百合谷に、季節出作中心の桑島の特徴は小嵐谷・大嵐谷・向山によく表われている。

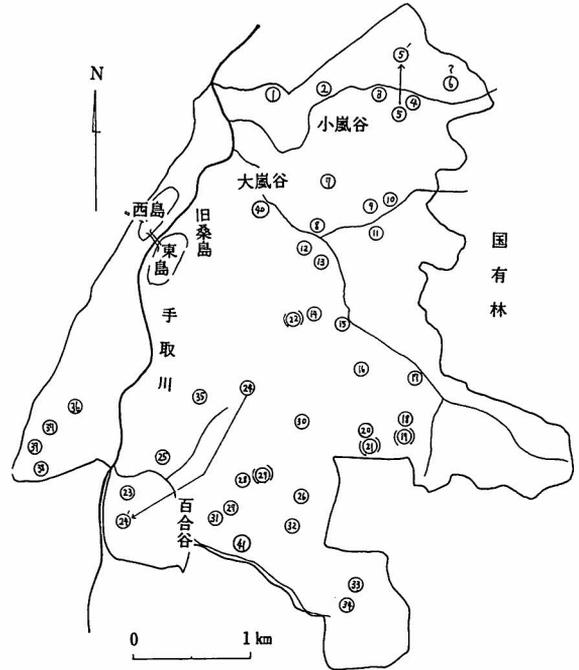


図3 桑島周辺における出作りの分布  
( ) は先住者が転出後の居住者

表3 桑島周辺地域の居住者

(×:家が絶えた) (○:居住した)

屋号	移住者	居住形態	土地所有	転出先	後の居住者	標高	S30年頃	備考
1	バンバ	◎	季節出作	請作	小松			
2	トクザイモ	◎	季節出作	自作	金沢			明治38年の水害で一里野へ出た。
3	カトイシ	◎	季節出作	自作	桑島			
4	イッシャ		季節出作	請(?)	?			
5	タロベエ		季節出作	請作	鶴来			
6	ヤザ		季節出作	請作	字白峰			昭和9年の水害時にいた。場所は推定。
7	チュウザプロ	◎	季節出作	自作	野々市			戦後までいた。
8	ヒコ	◎	季節出作	自作	桑島			
9	サプロヨモ		季節出作	請作	金沢			前はヘイシロ(赤谷27)がいた。
10	センニヨモ	◎	季節出作	請作	桑島			大正か昭和の頃に出た。
11	ゴロヨモ	◎	季節出作	自作	金沢			明治に出た。
12	セイダイ		季節出作	?	勝山→鶴来			
13	サンジ	◎	季節出作	自作	鶴来	800	○	
14	セイベ		季節出作	請作	?			戦時中に出て、そのあとにイシマが入った。
15	イッシャ	◎	季節出作	請作	桑島			
16	サプロザイモ	◎	季節出作	請→自	金沢			昭和9年の水害時にいた。昭和20年代に出た。
17	ゴンシロ		季節出作	請作	?			
18	シロ		季節出作	自作	金沢			昭和9年の水害時にいた。
19	シンジロ		季節出作	自作	金沢			昭和9年の水害時にいた。シロから土地を買った
20	トギヨモ		季節出作	自作	字白峰(市ノ郷)			明治時代に出た。前はセゴヨモ(大道谷へ)がいた。
21	セイシ	◎	季節出作	自作	桑島			トギヨモのあとに入り、昭和初期に出た。
22	イシマ	◎	季節出作	自作	鶴来		○	昭和30年ころまで出作りをしていた。
23	ジウモ	◎	季節出作	請作	桑島			水田を持っていた。戦争中までいた。
24	チウスケ		季節出作	請作	字白峰			水田を持っていた。戦後に出た。
25	キュウヨモ		季節出作	請→自	字白峰	550	○	冬は白峰にいた。三八襲撃の後に出た。水田所有。
26	マサヨモニキチ	◎	永住	請作	鶴来			昭和9年の水害時にいた。戦争中に出た。
27	コサプロ		永住	自作	大阪		○	昭和9年の水害時にいた。戦後出た。
28	イチヨモ		季節出作	自作	京都	イッシャモ	745	
29	イチヨモゴロ		永住	自作	字白峰		745	○
30	オナミ		季節出作	請作	×			昭和9年の水害の前に出た。
31	マサヨモ		永住	請作	大阪			戦後に出た。
32	ゼンザ		永住	請作	勝山			昭和9年の水害で出た。
33	ゴントロ		永住	自作	勝山			昭和9年の水害で出た。
34	トクヨモ		永住	自作	大阪			
35	イシマ	◎	永住	自作	鶴来			明治期に桑島に出、その後、大嵐谷(22)に出作り。
36	オクメ		季節出作	請作	金沢			前はイシダがいた。
37	ヘイヨモ	◎	季節出作	自・請	鶴来		○	
38	シンスケ	◎	季節出作	自作	桑島			昭和9年の水害時にいた。
39	ニジ	◎	季節出作	請作	野々市			
40	シンロク		季節出作	請作	?			
41	アキヤマイチヨモ		季節出作	請作	能登			

小嵐谷(1~16)・大嵐谷(7~22)・百合谷等(23~41)

出作りの分布と形態に関する考察

白峰村の出作りを調査してわかったのは、字白峰(大道谷)と字桑島・下田原では出作りの形態が全く対照的であり、また転出先も大きく異なっていることである。大道谷では確認できた123戸中

110戸が永住出作りであった（堂の森：50戸中41戸，太田谷し33戸中30戸，五十谷：20全部，菊安谷：20戸中19戸がそれぞれ永住—岩田，1987）。これに対し桑島しは確認できた156戸中123戸が季節出作り（下田原：51戸中43戸，赤谷：64戸中47戸，桑島周辺地域：41戸中33戸）で，大道谷とは全く逆であった。この原因として，いくつかの要素が考えられる。

第一に共有地に限ってのことだが，桑島・下田原では請作期間が20年と短かく，年間を通して安定した経営が難しかったために夏期のみ居住の季節出作り見られるという考え方である。確かにこうした考え方は正しいが，同時に私有地での請作（建前上は一年ごとの契約更新）や自作地においても，桑島・下田原では季節出作りがほとんどである。共有地での年期の短かさは，あくまでも季節出作りの発生要因の一つとして考えられるべきであろう。ただ，桑島区として共有地を管理する立場からすると，共有林は区の財政上重要な地位を占めていたので，他村売りや永代売りを禁止する方向にあった。こうした点にも桑島で永住出作りが発生しにくかった原因があると思える。

以上の共有地に関する要因の他に考えられるのは，字白峰（大道谷）と字桑島・下田原における出作りの形態が根本的に異なっていたということである。つまり，大道谷での出作りは本来永住形態であり，それにふさわしい居住文化・生活文化があった。一方，桑島・下田原では季節出作りをせざるを得ないか，あるいは季節出作りこそ本来の出作り形態であるとして受け入れたか定かでないが，いずれにせよこの方式がふさわしい居住形態として定着したのであろう。それ故，字白峰と字桑島の接点となる二つの地域（赤谷上流と百合谷）で永住出作りが散見され，しかも字白峰出身者が居住した。また，字白峰と直接境を接することのなかった字下田原では，元からの居住者を除いては永住形態は見られず，また字白峰出身者もいない。これは単なる偶然ではなく，永住出作り形態が本来は字白峰方面の生活文化であり，人の移動とともに永住出作りの形態も伝えられたと考えるのが妥当であろう。

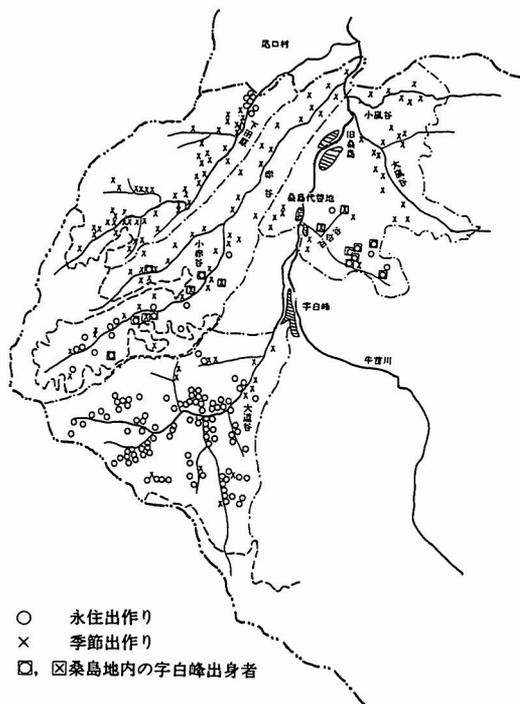


図4 白峰村における出作り形態

## 文 献

- 千葉徳爾（1983）いわゆる『出作り耕作』への疑問，はくさん第11巻1号，p.10-12，石川県白山自然保護センター  
 岩田憲二（1986）白山の自然誌7—白山の出作り，石川県白山自然保護センター  
 ———（1987）白峰村大道谷地区における出作り分布の変遷について，石川県白山自然保護センター研究報告第14集，p. 107-117.  
 岩田憲二他（1988）白山麓自然環境活用調査報告書，石川県白山自然保護センター  
 加藤助参（1935）白山山麓における出作の研究，京大経済論集，p.245-351

- 幸田清喜(1952)白山麓白峰村, 地域第1巻1号, p. 42-50  
—— (1956) 白山の出作り, 現代地理学講座第2巻, p. 270-289  
佐々木高明 (1972) 日本の焼畑, 古今書院  
白峰村史編集委員会 (1959) 白峰村史下巻, 白峰村  
—— (1961) 白峰村史上巻, 白峰村  
橘 礼吉 (1980) 白山麓の焼畑による商品作物栽培, 金沢市立工業高校紀要第7号, p. 1-26  
—— (1984) いわゆる『焼畑・出作り』への視点, はくさん第12巻2号, p.8-11, 石川県白山自然保護センター  
田中啓爾・幸田清喜 (1927) 白山山麓に於ける出作地滞 (一)地理学評論第3巻4号, p.281-298  
—— (1927)同上 (二), 地理学評論第3巻5号, p.382-396

### Summary

*Dezukuri*, the mountainous habitation-system with *yakihata* (slush and burning agriculture), sericulture, charcoal producing and so on, was seen in Shiraminemura above all in Mt. Hakusan region. In this paper, author referred to the distribution of *dezukuri* in that village especially before the "Economic High Growth Period(1960's)".

The distribution of *dezukuri* in Kuwajima district presented an apparent contrast to one in Ohmichidani district which was introduced in the last report (Iwata, 1987). In Kuwajima, most of *dezukuri*-habitants stayed in *dezukuri* area during only summer season (April to November) and they returned to *hon-son* (permanent settlement village), which is called *kisetsu-dezukuri* (seasonal *dezukuri*).

On the contrary, almost all the *dezukuri*-habitants lived in the mountain side through theyear in Ohmichidani, which is called *eikyuu-dezukuri* (permanent *dezukuri*).

The reason why the different *dezukuri*-system occurred at each district is the key to the thought of the origin of *dezukuri*. In the bounds areas of Kuwajima district (the upper course of Akadani-river and the whole part of Byakodani-river), several *eikyuu-dezukuri* habitants were seen in spite that *eikyuu-dezukuri* existed originally in Ohmichidani district. In addition, some of ex-habitants of Aza-Shiramine (Ushikubi-mura by the old name) which includes Omichidani district, also lived in those bounds areas mentioned above. These facts show that the *dezukuri*-system spread from Aza-Shiramine to Kuwajima district.